



竹取物語

「かぐやよ、今宵は
ひとり寝の夜と知り
慰めに参ったぞ」



いつのまにか私の背後に
忍び寄って擦るように
耳元でそう囁くのです

竹取物語（かぐやと復讐の物語）

プロローグ

それは朧月に似た満月の春の夜でした。私はなかなか眠ることが出来ずに障子を明け放ち、まんじりともせずに庭を眺めておりました。私が囚われているこの屋敷には小さな池があり、その表面には梅の花びらとぼんやりと白く丸い月の影が浮かんでいます。その輝きを見ていると、私の荒んだ心は、いつもの様にわずかばかり慰められるのでした。

いつか、月の皇帝に遣わされた使者たちが、この苦痛だらけの現世から、私を解き放ちにやってくる

それはとても甘美な夢想でしたが、私を救いに来る者など、月からもこの日の本のいずれからも現れる事など無いことは、十分わかっておりました。私がこの屋敷を逃げ出せば、私の生母にどのような酷い仕打ちが行われるか知れま

せぬ。そもそも自由を夢想することすら、私には許されてはいないのです。

「かぐやよ、今宵はひとり寝の夜と知り、慰めに参ったぞ」

とその容貌だけは美しい性根の腐り果てた男は、いつのまにか私の背後に忍び寄って擦るように耳元で囁くのです。

「な、何故案内（あない）もなく」と私は怯えて、男のほうを振り返りました。

「月光に誘われて参った」このあばら家のような朽ち果てた屋敷の土塀には、自由に出入りする穴が幾つもあるのでございます。

「お、おやめください、ひ、人を呼びますよ」と私は男の腕を振り払おうともがきましたが、痩せてはいても、女の私を押さえ込む力は十分過ぎるほどで、私は簡単に仰向けに組み伏されておりました。

「その天女にも見まごうばかりの顔が、苦痛に歪む姿がたまらぬ」と男は言っていて、私の着物に

強引に手をかけるのです。そして打ち掛けから始まり単を一枚ずつ剥ぎ取り、最後に袴を……。

「せめて、几帳の陰で」男の手が手際よく私の着物を剥いでいく姿は、あまりにも手馴れていてやりきれませぬ。まるで私の身体が、昔から男の所有物だったかのような、恐ろしい錯覚を覚えるのです。

「お前の顔や体を月の光に当てて……存分に、目で楽しみたいのだ」といいながら男は、私のむき出しの尖った肩に視線を据えて、私の髪を優しく撫でるのです。もはや私の身体を隠すものは何もなく両の腕で身体を包んでも、月光は白々と我が裸身を、闇の中に浮かび上がらせるのです。

「かぐやよ、そなたは……俺にとって地上の月かもしれぬ」と男は謎めいた言葉を呟いた後で、強引に口付けしてまいります。男にしてはまるで乙女の如き艶やかな紅い唇が、私の口を包みます。

「む、ぐ、あ、むあ」まるで私の魂まで吸い取るかのような、その激しい口付けは私の頭を麻痺させ、全ての善悪の意味をどうでもよくさせるのでした。そして、さきほどまでの嫌悪が霧散し、えもいわれぬ幸福感に包まれるのはどうしたことでしょうか。所詮は女の私の理性など、そのように脆く他愛も無い物だということなのでしょう……。

「な、何故私と正式に契っては下さらぬのですか……」と私が男に懇願するように尋ねると

「我らはいずれ滅びる種族。お前を夜な夜な弄ぶやつらこそが……次の世を担う者」

と男は悲しそうに、自嘲するように微笑み、私の裸の背中を搔き抱くのでした。

「……あ、あなた様は鬼じゃ」と私は男の悲しみの表情に、不思議な苛立ちと不安を覚えて思わず叫びました。

「鬼で結構」そういつて男は、薄笑いを浮かべながら、何を思ったか、突然犬のようにうずくまり私の足元に顔を近づけるのです。

「な、何をなされる」と私は男の奇態な姿に恐れをなして、後ずさろうとしたのですが

「逃げるな」と男は短く鋭く言って、私の右足を両手で強く捉えて離さないのです。

「な、何をなされる」と私が震える声で言うと「……清めてやろう」と男はそつと小声で呟きました。

そして男は哀れみを乞うような奇妙な表情を浮かべながら、私の足を手元に引き寄せます。「お、御放しく下さいませ」と私が言っても男は離そうとしません。そしてあるうことか男は躊躇いも見せずに私の右足の親指を……く、口に含んでしまったのです。

「ううああ、そそ、そのようなところ……き、汚のうございます」と私が言っても「静かに」と男は鋭く言って、その行為をやめようとしませぬ。指だけではなく、指の谷間の奥までも、熱心にペチャペチャと卑猥な音を立てながら時間をかけて舌を這わせるのです。男の舌が与える痒いような、くすぐったいような

その独特の感覚がたまらず、私は思わず声を漏らしてしまいます。

「あ、あああ……お、おやめてください」

徐々に私の下半身全体が熱を帯びたように汗ばんでまいります。私は知らずのうちに乳房を覆っていた両腕を解き放ち、快楽に身悶えしながら身体を何度も左右によじって浅ましく声をあげていたのです。

「あ、ううう、あああ、お、おやめください、に、匂いまする、そ、そのような、ところは匂いまする」

「お前の身体に穢れなどはないのだよ……」と男はふと顔をあげて私に言いました。月光を浴びた男の顔は白く、死人のように青ざめて見えます。

「……」

「何人の男に抱かれようと、お前の心が汚れない限り……」

「こ、心、汚れ？」この男は何を言っているのでしょうか。私を汚辱にまみれた地獄に、叩き落としておきなから……。

「お前は俺という闇に浮かぶ月なのだ」と男は
そういって、次は左の足の指をまたもや犬が、
餌にとりつくように執拗になめ始めたのです。
私はいつのまにか両足を大きく開き、男の秀麗
な顔の前で女の全てをさらけだしておりました。
男のもたらす快樂がわが身を妖しく包み込むの
を、期待で心を震わせながら闇の中で待ちわび
ているのです。